

レファレンス コーナー BRICSのひと つ「インド」を知 るつ

荻野洋司

「BRICS」とはブラジル、ロシア、インド、中国の四カ国を指す言葉である。二〇一五年にはトップテンの経済大国になる成長可能性を持つ国、ということと二年半前米国証券会社の投資家向け報告書に述べられたのが発端となった。

貧困やカーストなど、どちらかという暗いイメージで連想されてきたインドも、高い成長率を達成し続け、脚光を浴びているのである。

ここで紹介するのは、インド経済の変貌の様子を中心に解説している最近の図書で、一般や学生、ビジネスマンに勧めたい文献である。

まず、入門編として予備知識がなく短時間で全体像が理解できるのが、①門倉貴史著『手にとるようになるインド』（かんき出版 二〇〇五年）と②関口真理編『インドのことがマンガで三時間でわかる本』（明日香出版 二〇〇六年）。

①であるが、その書名の謳い文句は嘘ではない。グラフや図表が多

され、文章も平易である。全部で六一ある項目のうち、経済と産業の二章で三〇項目、他は、注目する理由の全体像、政治と外交、社会と文化に関するもの。特に「印僑」という、他の文献では殆ど触れられていないインド国籍を持つ外国在住のインド人に関しては三項目あり、華僑の約半分の現在一七〇〇万人に達する印僑が果たす、IT産業及び送金による経常収支の改善などへの貢献が述べられている。また経済発展の足枷となっている道路などのインフラ部門の状況や労使紛争の項目もあり、光の部分だけでなくマイナス面も含めバランス良く全体のイメージが把握できる。この意味で②も良い。マンガとあるが、それは見開き一項目という構成の左半分のみ。コラムを含め約一〇〇ある項目の内、現地ビジネス体験編が最多の二三、経済編は一九、政治や外交編が一五、宗教や伝統、生活などの社会関係が三六。執筆者は、約三〇年の歴史を持つ『ニッポン月刊誌』『インド通信』に関係する同国駐在のビジネススマンや研究者など。自己主張の強いインド人だが、駄目なものは駄目とはつきり言えは納得するとか、「簡単には紹介できないインド」を滞在や出張にも対応できるよう簡潔にまた面白くまとめている。両書は身近に置き参照するハンドブックとなっている。

このインドの、BRICSに占める位置を他の三カ国と比較して知るには、難しいが経済を共通する視点

から詳しく分析した次の二書がある。

③門倉貴史著『図説BRICS経済』（日本経済新聞社 二〇〇五年）、④アジア&ワールド協会編著『図解BRICS経済がみるみるわかる本』（PHP研究所 二〇〇五年）。

③は、①と同じ著者が各国毎の章立ての中でインド経済を記述しているが、他国と比べまた①よりも詳しい。これに対し④の章立ては異なる。前述した証券会社ゴールドマンサックスの報告書の内容を解説したあと、BRICSの世界に占める地位、ビジネス事情、素顔という構成で、インドは各章の中で他国と共に記述されている。

次は、企業進出に役立つビジネス書として、IT技術者のコストも高くなっている、という島田卓編著『巨大市場インドのすべて』（ダイヤモンド社 二〇〇五年）。二〇〇二年の著作『超巨大市場インド』の改訂版で、主要な州の経済解説、進出した日本企業の事例、成功の秘訣などに特徴があり、興味深く参考になる。著者は、九年前から日本語月刊誌『INDO WATCHER』

を刊行しているインド・ビジネス・センターの社長。また、榊原英資・吉越哲雄著『榊原英資インド巨大市場を読みとく』（東洋経済新報社 二〇〇五年）の特徴は、三章「インドに急接近するアジアの国々」でシンガポールとタイのインドとの経済関係、四章「熾烈な競争を勝ち抜く韓国企業」で韓国の進出を記述して

いることにある。それに小島眞著『インドのソフトウェア産業』（東洋経済新報社 二〇〇四年）は、四章で四年前に訪問したアジア最大のITソフトウェア企業TCSの強さの秘訣を具体的に紹介している。

更に読み進めてゆくのなら、榊原英資著『インドIT革命の驚異』（文春新書一六九 二〇〇一年）の二章「ソフトウェア技術者とIT革命の現場」と三章「インド経済―停滞からの脱出」。また『二世紀の新たな経済大国―インド』（NIRA政策研究一七巻七号 二〇〇四年七月）での「自由化後のインド経済」「インドの政治と社会」「日印ビジネスの現状と将来」の各章や経済発展のインドモデルなど。難解だがこれらにも是非挑戦して欲しい。

最後に紹介するのは、当研究所出版物二点。本誌今月号の特集であるシンポジウムを記録した『国際シンポジウム「アジアにおける経済統合とインド」開催報告書』（二〇〇五年）。講演や討議の要旨とスライドが記録されている（アサヒコム a s a h i . c o m）では発言の全文が日本語で見られるが、スライドはない。そして、『アジア動向年報』（当研究所研究支援部）の「インド」。この六月刊行予定の二〇〇六年版では二〇〇五年における国内政治、経済、対外関係の動きの他、重要日誌や主要統計が付されている。

（おぎの よつじ／アジア経済研究所図書館）